

平成26年度 プロジェクト研究所業績報告書（中間報告）

プロジェクト名	アート・コミュニケーションプロジェクト
研究所名	アート・コミュニケーション 研究所（所長 椎原 伸博 教授）
設置開始	2014. 4. 1
設置終了	2017. 3. 31

■研究の進捗状況（研究員の活動実績含む）

研究初年度ということもあり、予算執行の仕方等で戸惑いがあり、当初なかなか思い通りに研究を遂行することは困難であった。そのため、はじめのうちは他の団体との共催という形で、シンポジウムを二つ行った。11月に行った「文化芸術振興における大学の役割」は、日野キャンパスで行い、日野で展開中の「日野プロジェクト」の成果を披露するものであった。日野プロジェクトは、本研究と別枠ではあるが、下山副所長、高田研究員が深く関わっているものであり、今後連携して研究を行う方向性も見えてきた。当初予定していたとおり、二回のワークショップをどうにか遂行することができた。ただし、それぞれ準備期間と、学生への告知期間が短く、学生の参加者は予定より少ない結果となった。しかし、少人数でおこなったそれぞれのワークショップの内容は充実したものであった。各研究員は、それぞれの研究を遂行するなかで、本研究と関連するテーマについて、他の研究員と情報を共有する形で研究を遂行している。研究初年度は、その情報共有は思ったほど為されなかったため、今後の課題としたい。

■現在までの達成度

研究初年度は、準備期間が短かったことや、ワークショップを行う日程のスケジュール調整が難航して、当初の目標どおりにはいけなかった。また、美術系のワークショップに歴史的都市景観保全をテーマとするワークショップの内容を織り込む形になってしまった。一方、その代わりに行ったキャリア支援型のワークショップは、少人数によるものではありながらも、学生の反応が良く、今後も継続する必要性を感じた。本研究は、基本的にワークショップを企画し、学生がそれに参画したうえで、その成果をもとに行うことを基本とする。研究初年度は、研究成果の検討作業は手薄になったが、ワークショップの企画等は、おおむね当初の研究目標には達成した。

■次年度以降の研究（見込み）

次年度は、当初の計画書には「研究二年目も、研究初年度同様ワークショップ二回、研究会一回で、同様の予算配分で行う。ただし、研究二年度は、研究初年度で準備した、渋谷校地近隣の文化芸術施設との協働作業により、映画分野と演劇分野でのワークショップを行う。」と書いたが、美学美術史学科OGでNPO法人芸術資源開発機構副理事の三ツ木紀江氏に協力を仰ぎ、美術館における対話型鑑賞教育のファシリテーター養成を主体としたワークショップを予定している。養成したファシリテーターは、実際に美術館で鑑賞教育の現場体験をする必要があり、渋谷区の松濤美術館等での実施を検討中である。このファシリテーター養成のための、ワークショップは期間を長くとる必要があるため、ワークショップは一事業とし、それに関連する研究を中心に行う予定である。

■ 研究活動における成果

(1) 研究成果(雑誌、学会発表、図書等)

研究成果については、「実践女子学園アート・コミュニケーション研究所 平成 26 年度事業報告書」を作成した。報告書には、共催で行った二つのシンポジウム「芸術の腐葉土としてのダークサイド」「文化芸術振興における大学の役割」のうち、後者についてはテープ起こして、報告書に記載した。また、行った二つのワークショップについては、工藤安代研究員により「シブヤのスキマを見つけよう～あなただけの渋谷を発見～」の詳細な報告が為されている。「アートの現場で働くということ」については、時間的制約があるなかで、必要最小限の報告という形をおこなった。報告書は関連する大学、文化施設、NPO法人等に次年度早々に送付する。

それ以外の研究成果としては、神野真吾研究員は本務校の千葉大学で遂行中の WiCAN の活動と、当研究所の研究が深くリンクしており、「場とコミュニケーション - アートで変わる、アートも変わる -」等の報告会で、研究成果の発表を行った。また、工藤安代研究員は、美学美術史学科紀要 29 号に論文「ソーシャル・エンゲージド・アートの現在 - 社会的文脈に関わる近年のアート活動の動向」を発表した。

(2) 学生・生徒の教育及び支援に関する還元

平成 26 年 12 月 13 日、14 日に美術系ワークショップ「シブヤのスキマを見つけよう～あなただけの渋谷を発見～」、平成 27 年 2 月 21 日にキャリア支援型のワークショップ「アートの現場で働くということ」を行った。前者は、プロの写真家が都市を見つめる視線と、学生の視線との差異を明らかにして、ものの見方を学ぶものであった。後者は、アートの仕事には様々な可能性があり、そのために今必要な事について考察する機会を学生に与えた。本研究所の研究成果は、絶えず学生向けワークショップに還元されるシステムとなっている。